
雨上がりは恋模様～初音ミク「メルト」より～

聖騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨上がりは恋模様〜初音ミク「メルト」より〜

【Nコード】

N0905Z

【作者名】

聖騎士

【あらすじ】

沖荒夢滝さん主催の短編競作企画「月刊ワード小説賞12月期？」参加作品です。

(前書き)

沖荒夢滝さん主催の短編競作企画「月刊ワード小説賞12月期？」参加作品です。

? ?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?

煙るような花粉の舞い踊る学校への坂道は、暖かいと暑いの間地点を南風によって行ったり来たりしている。音源の位置が定かでない大型トラックのアスファルトを蹴る音が小さくなると、僕はため息を推進剤にして坂道を情性で上って行く。

春は出会いと別れの季節とか言うけれど、別れがなく出会いばかりでは心のキャパシティを超えてしまつてただの重荷でしかない。同じ顔ぶれで迎える新学期は日常の延長線上でしかなく、心のトキメキとか胸に溢れるキボーとかはなくなつてただ安穩と怠惰を強引に押しつけられるだけだ。

「おはよう」

何がそんなに楽しいのかわからないが、友人たちが無駄なエネルギーを歩行に惜しげもなく使用して僕を追い抜いていく。埃っぽい昇降口に入ると、ようやく暖かいのエリアへ気温の針が揺れ戻ってきた。

「お、おはよ」

一人の女子が、俯き加減に僕へ挨拶という暴力を振るってくる。腰よりも長い髪を小さめの頭の左右斜め四十五度上方の位置で、大きめのヘアバンドで縛っている。左の髪の根元には白い花弁に黄色い花心をあしらつた花の髪飾りを着けている。なんだメルヘンっ娘か。

「ちょ、む、無視しないでよ」

「あれ、今心の中で返したけど」

「むっ」

みくは薄い唇を尖らせて小走りについてくる。

「私はちょーのーりよく者じゃないもん」

「僕だつてそうだよ」

「ね、なんか言うことない」

みくは僕の前で満面の笑みを浮かべて通行を阻害している。特に廊下は土砂崩れなど起こしている危険はなさそうなので、そのまま強行突破を敢行する。

「あーもう」

みくは再度ディフェンスを試みるが、僕のフェイントに釣られて窓側の壁へ。

「遊んでると遅れるぞ」

まだ時間はあるけど、こんな人混みの中ワールドカップを目指してフットワークトレーニングをする意味も意義も意欲もない。

「せっかく短くしてみたのに」

僕の後ろでみくが指をハサミにして前髪をいじっていた。

長距離を上手く完走するコツは、ペースを崩さないことだ。急ぎ過ぎず楽をし過ぎず、大多数を占める中間層に埋没して個性を霧消させる。普通に生きていくだけで刺激に満ちたこの世界では、凡庸に生きる方が遥かに難しい。

朝の天気予報で「今日は晴れでしょう」と、笑顔と共に宣っていたお天気お姉さんは綺麗だから許す。眉毛の濃いお天気お兄さんだったら、殴り倒してやりたいけど。

バケツをひっくり返したという形容は、陳腐で使いたくないから使わない。土砂降りの雨が、昇降口の中まで弾いて黒いシミを作ったり消えていったり。

「参ったな」

綺麗だったから信じちゃったけど、綺麗なお姉さんはキャッチセールスでも引く手数多だ。今は騙されたと思って濡れて帰って風邪をひくべきか。

僕が憂鬱な刺激に心を満たされていると、背後で小さな足音が聞こえる。洪面のスナイパーのごとく「後ろに立つな」って言うてみたかったけれど、知らない人と刺激を共有する高尚な趣味はないのでため息をついてみた。

「ねえ君」

僕を「君」と呼ぶのはあの娘しかない。朝も帰りも同じ場所で会うなんて、これは運命か策略か謀略か。

案の定みくはカバンを探りながら、僕の後ろ斜め四十五度でスリップストリームにつく。走ってるわけではないから、何の効果もないうって教えてあげたい。

「傘、忘れたの」

語尾が上がっているということは、これは質問されているのだろう。僕は頷く代わりに首を傾げてみた。

「よければいっしょにいこ」

なんだ計略か。しかしびしょぬれになって「水もしたたるホトトギス」とかってボケを母にする予定をケータイのスケジュールに書き込み忘れていたのを思い出したので、素直にみくの好意に甘えることにする。

「しょうがないから入ってやるよ」

「なによその言い方」

頬をピンクに染めながらピンクのオリタタミ傘を広げるなんて、韻を踏んでいるというより強引な字余りのようだ。

一人で使用することを目的としたオリタタミ傘が、二人で入るには小さ過ぎるってことはわかっていた。でもこの雨の中身体的大部分が濡れないでいられることには、感謝すべきなんだろうな。

時折みくの右手が僕の左腕に触れ、その度にみくは一センチ距離を取る。そして僕の右肩が一センチ濡れる。

女の子といっしょの傘に入るって昭和の歌じゃ相合い傘って表現してるけど、百年後の歌じゃ何て言われてるんだろう。傘自体なくなってるかもな。いや人間そのものが存在してないかも。

「もう駅に着いちゃうね」

雨足が弱まってきたのと対照的に、空が少し明るくなってくる。埃っぽい町と花粉にまみれた大気が洗い流されて、青臭い雨の匂いに満たされている。

「うん」

素直に頷いてみた。傘半分だけ素直になっても人生のペースは乱れないだろう。人生はたぶんおそらくきつと長いんだから。

みくは俯いたまま、足を踏み出す度革靴のつま先から弾く水滴を見つめていた。

何の嫌がらせか理解に苦しむが、駅に着くと同時に空に晴れ間が広がる。僕は飛沫を上げてロータリーを走るバスに気を取られた振りをして、僕はみくが傘をオリタタムのを待っていた。

「じゃあ私向こうだから」

踵を返しながら手を振るみくに、三十五%程度の笑顔を向ける。濡れた右肩の分十五%引いた。

「あ、そだ」

みくは小気味良い革靴の音を鳴らせて僕の方へ向き直る。ピンクのスカートが翻り、通りすがりのオヤジの眼球が忙しく上下している。

「私ね」

みくの大きな瞳が揺れ、僕をじっと見つめている。穴が空いたらどうしてくれる。

「君のことが」

ちよつと待て。それはここではまずいだろう。ぜひ前向きに検討して善処したいとは思っけれども、僕の心は相合い傘できるほど大きくもオリタタミもできない。

僕の心がフライングパイレーツみたいに揺れ動いているのを知ってか知らずか、みくは

片目をつぶってしてやったりの笑顔を披露する。

「なんてね」

遠ざかるピンクのスカートと長い髪を、ため息と共に見送る。明日埃っぽい昇降口で会った時には聞いてみよう。恋に落ちる音を聞いたことがあるかつて。

灰色の雲間から眩しい夕焼け空が広がって、僕の心に晴れ間を作る。明日は暑いエリアに針が動きそうだ。

「雨上がりは恋模様」初音ミク「メルト」より」
＜了＞

(後書き)

? ?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0905z/>

雨上がりは恋模様～初音ミク「メルト」より～

2011年12月3日14時51分発行